

河川・流域(11) (3-A-13-2~3-A-15-1)

本セッションは、年会最後の講演会となった。終了時には10人程度の参加者で、熱心な講演に応えるには残念な環境であった。年会運営での配慮が望まれる。講演内容は、分析方法からデータベースの取り扱いまで多岐に渡り、水環境解析にはまだ多くの基礎的課題が残っていることが強く感じられた。水環境の調査分析の講演としては、分析法を含め8編のうち5編を占めたが、山岳地域河川水質について(森, 森, 青井)は大気汚染と水質変化の関連の詳細そして汚染防止のための啓蒙活動、都市内河川水質に対する降雨の影響について(中地, 市原, 山田, 筆本)は下水処理場放流水の寄与についての現地調査の継続と水環境管理対策への発展、新しい発ガン性物質であるPFOSとPFOAの河川動態について(Lien, Fujii, Tanaka, Fukagawa)は発生源についての調査と管理概念、天然有機物の逆浸透膜による抽出精製について(日下部, 池田, 川端, 東, 清水, 霜越)は損失の減少と水環境への適用、スペクトル吸収によるシアノバクテリアの定量(Lokuhewage, Toyooka)は毒性藻類検出への現実的対応方法など、さらなる研究の継続と具体的な対策手法の開発が望まれた。データ解析とデータベースについての2件の講演については、流出負荷モデルとcell sizeの関係から(Shiobakoti, Fujii, Ihara, Kitpati, Tanaka)はさらなる発展のためのモデルの改良、データベースの構築と整備について(都筑, 中山, 国井)は新しい整備データ収集の安定性への配慮など、新しい解析・検討手法の開発が望まれる。また環境改善の1件は、河川海域への必須栄養塩である珪酸供給について(田宮, 高崎, 神尾), シラスからの溶出機構とさらにその現実的対応への考察が必要である。いずれもこのセッションの講演は、新しい水環境のテーマであり、研究の継続とその新展開が望まれる。

(北海道大学大学院・工 橋 治国)